

【研究ノート】

介護過程テキストにみるアセスメントの位置づけと生活課題の捉え方 — 情報収集から生活課題抽出までの記述整理 —

棚田 裕二 河内 佑美
Yuji Tanada Yumi Kouchi

本研究は、介護福祉士養成課程で標準的に使用されている介護過程テキストを対象に、アセスメントの位置づけおよび情報収集から生活課題抽出に至る思考過程の捉え方を整理・比較することを目的とした。分析の結果、各テキストにおいてアセスメントは情報収集を基盤とし、利用者本人の生活を多面的・統合的に理解した上で生活課題を導く中核的な思考過程として位置づけられていた。一方で、情報収集とアセスメントの関係性や、分析・解釈から生活課題抽出に至る思考過程の示し方とその特徴には差異がみられた。これらの結果から、介護過程教育においては思考過程の可視化が重要な課題であることが示唆された。

キーワード 介護過程 アセスメント 生活課題 思考過程 介護福祉士養成教育

I. はじめに

介護福祉士養成課程における「介護過程」は、介護福祉士に求められる専門職としての役割や機能を踏まえ、各領域で学んだ知識・技術を統合し、介護実践に結びつけるための中核的科目として位置づけられている。特に、利用者本人（以下、本人とする）が主体に生活を送ることを目的として、本人の状態や状況を多面的に捉え、根拠に基づいたケアを実践するための思考過程を学ぶ点に、この科目の大きな意義がある。

介護過程は、本人の望む生活の実現に向けて生活課題を明確化し、その解決に向けたケアを実践する一連のプロセスである。その出発点となるのがアセスメントであり、介護過程の展開はアセスメントから始まる。アセスメントには、「評価」「判断」「見極め」といった意味が含まれ、介護過程においては、本人に関する情報を収集し、それらを分析・解釈・統合することを通して、ケアの方向性を総合的に判断し、生活課題を抽出するための重要な過程と位置づけられている。そのアセスメントでは、本人の心身の状況や生活状況、思いや願い、生活歴や文化などといった多様な情報を、専門的知識・技術に基づいて捉えることが求められる。また、複数の情報を関連づけ、総合的に解釈することにより、本人の望む生活の実現を困難にしている要因や生活上の課題を明らかにしていく。この際、活動（ADL・IADL）、参加や役割、健康、社会生活、安心・安楽や生活の満足感といった視点は、アセスメントの着眼点であると同時に、ケアの方向性や評価を支える指標として重要な意味をもつ（終崎 2021）。

一方で、介護過程に関するテキストにおいては、アセスメントや生活課題の捉え方、情報を分析・解

積する際の視点に違いがみられる。そこで本研究では、介護過程に関する既存のテキストを分析対象とし、介護過程におけるアセスメントの位置づけと、情報収集から生活課題抽出に至る思考過程について整理・検討することを目的とする。特に、生活課題がどのような考え方や手続きを経て導き出されているのかに焦点を当て、介護過程におけるアセスメントの特徴と意義を明らかにすることを旨とする。

II. 研究方法

1. 分析対象

本研究では、介護過程に関する理解や教育内容の整理を目的として、介護福祉士養成課程で広く用いられている介護過程に関するテキストを分析対象とした。具体的には、以下の文献を対象とし、介護過程の中でもアセスメントに関する記述に着目して分析を行った。

- ・ 柘崎京子編集 (2021) 『介護過程』 建帛社
- ・ 介護福祉士養成講座編集委員会編集 (2022) 『最新介護福祉士養成講座9 介護過程 第2版』 中央法規出版
- ・ 介護福祉教育研究会編集 (2018) 『新版 楽しく学ぶ介護過程』 時潮社
- ・ 石野育子編集 (2014) 『介護過程 第3版』 メヂカルフレンド社

これらは、介護福祉士養成教育において標準的に用いられているテキストであり、介護過程の基本的な考え方や展開方法が体系的に示されている点から、本研究の分析対象として妥当であると判断した。

2. 分析内容および分析視点

分析にあたっては、介護過程の一連のプロセスのうち、特に情報収集からアセスメント、生活課題抽出に至る思考過程に焦点を当てた。具体的には、各テキストにおける以下の点について記述内容を整理・比較した。

第一に、アセスメントの定義および位置づけである。各テキストにおいて、アセスメントが介護過程全体の中でどのように説明されているのかを整理した。

第二に、情報の分析・解釈・関連づけ・統合などといった思考過程の捉え方である。情報をどのように扱い、複数の情報をどのように結びつけ、意味づけているのかについて、用語の使い方や説明の重点に着目して整理を行った。

第三に、生活課題抽出および判断に関する記述である。生活課題の定義、生活課題とするか否かの判断基準、優先順位の考え方、ならびに生活課題の表現方法について、各テキストの特徴を比較した。

なお、本研究は新たな理論構築や独自の解釈を目的とするものではなく、既存テキストに記載されている内容をもとに、介護過程におけるアセスメントおよび生活課題抽出の思考過程を整理することを目的とした文献分析である。分析結果の解釈や最終的な評価については、教育実践との関連を踏まえつつ、慎重に検討することとした。

Ⅲ. 結果

1. アセスメントの位置づけに関する整理

いずれのテキストにおいても、アセスメントは介護過程の初期段階に位置づけられ、以降の生活課題抽出や介護計画の立案に直接的な影響を与える重要な過程として示されていた（表1）。特に、アセスメントは単なる情報整理ではなく、収集した情報を分析・解釈し、関連づけや統合を行うことで、ケアの方向性や生活課題を導き出す思考過程として共通して説明されている。

（表1） アセスメントの位置づけに関する整理

文献	アセスメントの位置づけ	定義・説明の特徴	強調されている視点
柘崎京子（2021）	介護過程における中核的プロセス	情報収集・分析・解釈を通して支援の方向性を判断し、生活課題を抽出する過程	本人の望む生活、活動・参加、ICF、生活の個性
介護福祉士養成講座編集委員会（2022）	介護過程の出発点	情報を解釈し、関連づけ・統合化することで生活課題を明確化する過程	専門的知識の活用、生活のしづらさの背景理解
介護福祉教育研究会（2018）	判断に至る前段階	分析・解釈・統合を通して全体像と生活課題を理解する過程	客観性、妥当性、多様な解釈の可能性
石野育子（2014）	課題発見の基盤	ニーズの充足・未充足を明らかにし、原因を探る思考過程	ニーズ、原因分析、問題解決思考

一方で、アセスメントの定義や説明には、テキストごとに特徴がみられた。柘崎（2021）は、本人の望む生活を基盤とし、活動・参加を中心に据えた視点から、生活課題を抽出する過程としてアセスメントを位置づけている点に特徴がある。また、ICFの視点を用いることで、生活機能全体を捉えることの重要性が示されていた。介護福祉士養成講座編集委員会（2022）では、アセスメントを「介護過程の展開はアセスメントから始まる」と明確に位置づけ、情報の解釈・関連づけ・統合化を通して、生活のしづらさの背景を理解する作業として説明している点が特徴的であった。ここでは、専門的知識を根拠として情報を読み解く姿勢が重要としている。介護福祉教育研究会（2018）は、分析・解釈・統合の結果が一つに定まるものではないことを明示し、介護福祉職の価値観や経験が影響する可能性を踏まえつつ、妥当性や客観性を確保する必要性を示している。この点から、アセスメントを柔軟かつ検討可能な過程として捉えていることが示唆された。また、石野（2014）では、アセスメントを生活上のニーズや課題

の原因を明らかにするための基盤的過程として位置づけ、問題解決思考の枠組みを用いて説明している点に特徴がみられた。ここでは、ニーズの未充足とその原因を探ることが、生活課題の明確化につながると整理されている。

以上より、各テキストに共通して、アセスメントは介護過程における判断と実践を支える基盤的な思考過程として位置づけられていることが確認された。一方で、その定義や説明の焦点は、本人の望む生活、生活のしづらさの理解、ニーズや原因分析など、テキストごとに異なる側面があり、アセスメントの多面的な性格が示されている。

2. 情報の分析・解釈から生活課題抽出に至る思考構造

分析対象とした各テキストにおける「情報の分析・解釈から生活課題抽出に至る思考構造」は、以下の通り、段階的かつ連続的な構造をもつことが明らかとなった。

- ① 情報を事実として収集する
- ② 情報の意味を専門的に分析・解釈する
- ③ 複数の情報を関連づけ、統合する
- ④ 介護過程展開の視点を基準にケアの方向性を判断する
- ⑤ 生活課題として言語化する

一方で、この思考過程は経験に裏打ちされた気づきや判断などを多く含み、教育場面においては「どこで」「何を」「どのように考えているのか」が可視化されにくいという課題も示唆された。

1) 情報の分析・解釈の位置づけ

分析対象とした各テキストでは、いずれも「情報の分析・解釈」を生活課題抽出に至る中核的な思考過程として位置づけていた。単に情報を整理・列挙するのではなく、収集した情報をもつ意味を専門的視点から読み取り、複数の情報を関連づけ、統合することが強調されている。とくに、「情報(事実)」「その情報が示す意味」「利用者の望む生活との関係」を結びつけて考える思考が、生活課題抽出の前提として共通して示されていた。

2) 情報の分析・解釈の進め方の類型

柘崎(2021)は、情報の分析・解釈の進め方として、以下の3つの方法が示されている。

- ・利用者の言動(訴え、願い、行動など)や、介護職が目指す情報(気になる情報)に対し、それらに関連する情報を中心に収集し、情報の分析・解釈をすすめる方法
- ・情報収集シートなどを用いて総合的に情報収集を行い、その情報の中から注目する情報(気になる情報)を選び、関連情報をみながら情報の分析・解釈を進める方法
- ・情報収集シートなどを用いて総合的に情報収集を行い、全体的な情報をみながら、情報の分析・解釈をすすめる方法

これらはいずれも、情報を単独で判断するのではなく、関連づけと統合を通して意味づけるという点で共通しており、分析・解釈が思考の中心に位置づけられていることが確認できた。また、「統合・判断」

という用語を用いていた。なお、統合とは、2つ以上のものを合わせてまとめることであり、判断とは、考えをまとめること、考えを決めることとしていた。特に注目されるのは、情報の分析・解釈の進め方を具体的な方法として類型化し、整理して提示している点である。分析対象とした他のテキストでは、分析・解釈の重要性や視点は示されているものの、その進め方を複数の方法として明確に区分して提示する構成は必ずしもみられなかった。その点において、終崎（2021）は、分析・解釈の過程を学習者が具体的にイメージしやすい形で整理している点に特徴があるといえる。

3) 分析・解釈を支える「介護過程展開の視点」

分析対象とした各テキストでは、情報の分析・解釈を行う際の拠り所として、「介護過程展開の視点」が示されている。具体的には、「活動（ADL・IADL）の維持・改善」「参加や役割の維持・拡充」「健康の維持・改善」「社会生活の維持・拡充」「安心・安楽、生活の満足感」といった視点である。これらの視点は、分析・解釈の段階において「何をもって問題とするのか」「どのような状態を目指すのか」を判断する基準として機能している。すなわち、情報の分析・解釈は手続式的に行われるものではなく、本人が望む生活、尊厳の保持、本人主体、自立支援といった理念を基盤に方向づけられていることが明らかとなった。また、介護福祉士養成講座編集委員会（2022）では、「自立」「快適」「安全」をアセスメントの3つの視点から生活課題を導き出していた。

4) 分析・解釈から生活課題抽出への論理的連続性

分析対象とした各テキストに共通していたのは、生活課題が「情報」から直接導かれるのではなく、分析・解釈・統合という思考過程を経て導出されるという構造である。とくに介護福祉士養成講座編集委員会（2022）では、複数の情報の関連づけと統合化を行うことによって、「利用者の望む生活の実現を困難にしている課題」を明確にするプロセスであることが明示されている。また、生活課題は身体機能の低下や問題点といったマイナス面の解決に限らず、本人の強みや可能性、望む生活の実現や維持に必要な事項も含めて捉えられていた。

このことから、生活課題とは現状と目標（望む生活）との間に生じている差を、介護福祉職のケアによって調整可能な課題として言語化したものであると整理できる。

3. 生活課題の定義・優先順位の整理

分析対象とした各テキストにおける生活課題は、本人の望む生活を基準とし、ニーズや問題点を踏まえつつ、介護福祉職のケアによって対応可能な内容として、分析・判断の根拠を明確にして設定されていた。また、生活課題の優先順位づけは、単なる緊急度だけでなく、本人の願いや生活の継続性、自立支援の視点を含めた多面的判断によって行われており、介護過程における専門的思考の集約点として位置づけられていることが示唆された。

1) 生活課題の定義に関する共通点

分析対象とした各テキストにおいて、「生活課題」は共通して本人の望む生活の実現または継続を阻害している事柄として定義されていた。終崎（2021）では、生活課題を「利用者にとって、解決・改善・

維持・実現しなければならない（したほうがよい）こと」とし、単なる問題点の指摘にとどまらない概念として整理している。また、介護福祉士養成講座編集委員会（2022）では、生活課題を「利用者が望む暮らしを実現または継続するために、解決しなければならない困りごと」と定義し、生活課題が生活全体に根ざした概念であることを強調している。これらの記述から、生活課題は身体機能の低下や生活上の困難といったマイナス面の解決だけでなく、本人の強みや可能性の活用、生活の質の維持・向上に関わる内容も含むものとして位置づけられていることが確認できた。

2) 生活課題と「ニーズ」「問題点」との違い

分析対象とした各テキストでは、生活課題は本人のニーズや問題点と重なり合いながらも、それらと同一視されるものではないことが示されている。とくに石野（2014）では、生活課題は「現状と目標との間に差がある場合に生じるもの」と説明され、その差を生み出している原因を明らかにすることが課題抽出の要点であるとされている。また、ニーズは本来、本人を主語として捉えられるべきものであり、介護福祉職の一方的判断によって設定されるものではないことが強調されている。これらを踏まえると、生活課題とは、本人のニーズと専門職としての判断をすり合わせた結果として導かれる、介護福祉職のケアによって対応可能な課題であると整理できる。

3) 生活課題抽出における判断と根拠の重視

分析対象とした各テキストに共通していたのは、生活課題の決定において「なぜそれを生活課題とするのか」「なぜ生活課題としないのか」という判断の根拠を明確にする必要性が強調されている点である。介護福祉教育研究会（2018）では、生活課題の決定は「情報の分析・解釈・統合」および「介護の方向性の判断」を踏まえて行われるとされており、判断の経緯を言語化し、本人や他の介護福祉職と共有できる形にすることが求められている。このことから、生活課題は直感的・感覚的に設定されるものではなく、分析過程と論理的に連動した結果として位置づけられていることが明らかとなった。

4) 生活課題の優先順位づけに関する視点

生活課題は一つに限定されることは少なく、複数の課題が同時に存在することが前提とされている。そのため、各テキストでは優先順位づけの必要性が示されていた。優先順位の判断基準として共通して挙げられていたのは、以下のような視点である。

- ・生命を脅かすような緊急性の有無
- ・身体的・心理的・社会的苦痛の大きさ
- ・生活支障や生活の継続性への影響
- ・本人の願いや要望
- ・自立や社会参加への影響

また、優先順位を「つけない」場合であっても、その理由や根拠を明確にすることが望ましいとされており、判断の透明性が重視されている点も特徴的であった。

IV. 考察

1. アセスメントと生活課題の概念的特徴

本研究では、介護過程に関する複数の既存テキストを分析対象とし、特に「アセスメント」と「生活課題」がどのように位置づけられ、どのような概念として説明されているかを整理してきた。以下では、結果を踏まえ、アセスメントおよび生活課題の概念的特徴について考察する。

1) アセスメントの概念的特徴

各テキストにおいてアセスメントは共通して、介護過程を展開するうえで位置づけられる重要な思考過程として示されていた。しかし、その概念的な捉え方には一定の幅が認められた。

多くのテキストでは、アセスメントを単なる情報の整理や分類ではなく、本人の生活状況や背景を踏まえた意味づけ・解釈の過程として説明していた。特に、心身機能や生活行為といった表面的な事実情報を、そのまま問題として扱うのではなく、「なぜその状態にあるのか」「その状態が生活にどのような影響を与えているのか」を読み取ることが強調されていた。

一方で、一部のテキストでは、アセスメントが情報収集とほぼ連続的に説明され、思考過程としての独立性がやや曖昧な記述も見られた。このことから、アセスメントは共通して重要視されているものの、思考過程の表現方法についてはテキスト間で差異があることが示唆される。

以上より、介護過程におけるアセスメントは、情報を根拠に生活全体を統合的に捉える専門的思考過程として位置づけられている一方で、その具体的な思考の扱い方については、必ずしも一様ではなく、記述の構成や焦点の置き方は様々であった。

2) 生活課題の概念的特徴

生活課題については、いずれのテキストにおいても、アセスメントを経て導き出される中心的要素として位置づけられていた。ただし、その定義や表現には特徴的な違いが認められた。

多くのテキストでは、生活課題を「利用者がその人らしい生活を送る上で生じている困難」や「生活の継続・質に影響を及ぼす問題」として捉えており、医学的問題や機能障害そのものではない点が強調されていた。すなわち、生活課題は心身機能の低下や疾患名を直接的に示すものではなく、生活との関連において意味づけられた課題であると整理できる。

また、生活課題は単一ではなく複数抽出されることを前提とし、その中から優先順位を検討する必要性が示されていた。この点から、生活課題は固定的な「問題」ではなく、本人の価値観や生活背景、生活環境、歩んできた文化や歴史などを踏まえて総合的に構成される概念であることがうかがえる。

一方で、生活課題とニーズといった用語の使い分けが十分に整理されていない記述も見られ、概念の混在が生じやすい可能性も示唆された。

3) アセスメントと生活課題の関係性

アセスメントと生活課題は独立した概念ではなく、連続的かつ相互に関連する思考構造の中に位置づけられていることが明らかとなった。アセスメントは、収集した情報を統合・解釈する過程であり、そ

こから導かれたものが生活課題である。一方で、生活課題の捉え方は、アセスメントの視点や枠組みによって左右されるため、両者は一方向的な関係ではないと考えられる。このことから、介護過程における専門性は、アセスメントを「正しく行うこと」だけでなく、生活課題をどのような概念として捉え、どのように優先づけるかという判断の積み重ねにあると整理できる。

2. 介護過程テキストにおける思考過程の可視化と教育的課題

本研究では、介護過程に関する既存テキストの記述を分析し、情報収集からアセスメント、生活課題抽出に至る思考構造を整理してきた。以下では、その結果を踏まえ、介護過程テキストにおける思考過程の可視化と、そこから見えてくる教育的課題について考察する。

1) 介護過程テキストにおける思考過程の可視化のあり方

介護過程テキストの多くは、「情報収集」「アセスメント」「生活課題抽出」といった過程を段階的に示しているものの、各段階をつなぐ思考過程の具体的な内容については、必ずしも十分に言語化されていないことが明らかとなった。特に、情報収集からアセスメントへの移行においては、収集すべき項目や視点は詳細に示されている一方で、それらの情報をどのように統合し、どのような根拠に基づいて解釈するのかについての記述は限定的であった。そのため、アセスメントが「情報をまとめる作業」として認識されやすい構造になっている可能性が考えられる。

また、生活課題抽出についても、アセスメントの結果として生活課題が導かれることは示されているが、どの情報を重視し、どのような判断過程を経て生活課題として設定するのかという思考の流れは、明確に可視化することは容易ではないと考えられる。これらのことから、介護過程テキストにおける思考過程は、手順としては示されているが、思考としては可視化されにくい特徴を有しているといえる。

2) 介護過程における思考過程の共有の難しさと教育的課題

思考過程の可視化が十分でないことは、学習者にとって介護過程の理解を難しくする要因となり得る。特に、介護過程を初めて学ぶ学生にとっては、「何を考えればよいのか」「なぜその生活課題に至るのか」が分かりにくく、形式的な手順の理解にとどまる可能性がある。

その結果、介護過程が「書類作成のための作業」や「決められた型に当てはめるもの」として捉えられ、本人の生活を深く理解するための思考枠組みとして十分に活用されない危険性も指摘できる。また、同じ事例を用いても、学習者ごとに生活課題の捉え方が大きく異なる場合、その違いが思考の差異なのか、理解不足によるものなのかを判断しにくいという教育上の課題も生じる。

3) 教育的課題としての「思考過程の可視化」

以上の分析から、介護過程教育における重要な課題の一つとして、思考過程の可視化が挙げられる。介護過程を単なる手順として教えるのではなく、情報と情報をどのような根拠でつなぎ、どの視点で意味づけを行うのかといった思考のプロセスを、教育の中で丁寧に扱う必要があると考えられる。特に、アセスメントから生活課題抽出に至る過程は、専門職としての判断力が最も求められる部分であり、ここを曖昧なままにすると、介護過程全体の理解が表層的なものにとどまる可能性が高い。したがって、

今後の介護過程テキストや教育実践においては、思考過程を例示や図式、言語的説明を通して示す工夫が求められる。

V. まとめ

本研究では、介護福祉士養成課程において標準的に使用されている複数の介護過程テキストを分析対象とし、介護過程におけるアセスメントの位置づけ、および情報収集から生活課題抽出に至る思考過程の記述構造について整理・比較を行った。その結果、各テキストに共通して、アセスメントは情報収集を基盤とし、本人の生活を多面的・統合的に理解した上で、生活課題を導き出すための中核的な思考過程として位置づけられていることが明らかとなった。一方で、情報収集とアセスメントの関係性については、段階的に区別する立場と、連続的な思考過程として捉える立場がみられ、アセスメントの捉え方には一定の差異が存在していた。

また、情報の分析・解釈から生活課題抽出に至る思考構造を整理した結果、介護過程テキストでは、収集すべき情報や視点は比較的明確に示されているものの、それらの情報をどのように統合し、どの根拠に基づいて生活課題として設定するのかという思考過程については、必ずしも十分に言語化されていないことが示唆された。この点は、介護過程が専門職としての判断を要する思考過程であるにもかかわらず、その具体的な内容は、明確に示されにくいという特徴を反映していると考えられる。

以上より、本研究の到達点として、介護過程テキストにおけるアセスメントおよび生活課題の概念的特徴を整理するとともに、情報収集から生活課題抽出に至る思考過程の構造的な特徴と、その示し方とその特徴を明らかにした。これは、介護過程を「手順」としてではなく、「思考の枠組み」として捉える必要性を再確認するものであり、介護過程教育を検討する上での基礎的資料となり得ると考えられる。

一方、本研究は既存テキストの記述内容の分析に限定されており、実際の教育実践や学習者の理解過程、あるいは現場における介護過程の運用実態を直接的に検討したものではない。そのため、本研究で示した思考過程の特徴や教育的課題については、記述レベルの整理にとどまっている点が限界として挙げられる。今後は、授業実践や演習場面における介護過程の指導方法、学生の思考過程の変化、さらには現場実践との接続を視野に入れた検討を行うことで、介護過程教育における思考の可視化や理解促進に向けた具体的方策を明らかにしていくことが課題である。

文献

- ・ 椋崎京子編集 (2021) 『介護過程』 建帛社
- ・ 介護福祉士養成講座編集委員会編集 (2022) 『最新介護福祉士養成講座 9 介護過程 第2版』 中央法規出版
- ・ 介護福祉教育研究会編集 (2018) 『新版 楽しく学ぶ介護過程』 時潮社
- ・ 石野育子編集 (2014) 『介護過程 第3版』 メヂカルフレンド社